

# 村野藤吾による関西大学千里山キャンパスにおける アンビルト建築について

西田 貫 人

## 1. はじめに

建築の歴史を振り返ると、ウラジミール・タトリンの「第3インターナショナル記念塔」やブルーノ・タウトの「生駒山嶺小都市計画」、ザハ・ハデイド・アーキテクツの「新国立競技場」など、実現されなかった建築の構想、提案が多くある。技術的、経済的な要因や、社会的な制約などから実現されなかったそれらの計画案や、未来を思い描いて描かれた提案は、夢があり刺激的なものや、描いた人の思想を強く反映しているものが多い。

村野藤吾は多作の建築家であり、関西大学千里山キャンパス内においても40近くの建物を設計している。村野・森建築事務所の設計図面は、現在、京都工芸繊維大学美術工芸資料館に「村野コレクション」として収蔵されている。また、同館所蔵の50,000点を超える設計図面の中に、関西大学千里山キャンパスに関する資料が2,180枚存在しており、この資料の中に実現されなかった計画案がいくつもある。

今回は、その中から村野が千里山キャンパスの設計への思考が強く反映されているのではないかとと思われる2案を紹介する。

## 2. 関西大学と村野藤吾

1922年に大学令により、昇格をはたした関西大学は、千里山に学舎を構えた。中央には東洋一と称されたグラウンドを見下ろすように大学



図1 大学本館

本館、図書館、豫科校舎などが建てられた。戦後、新制大学への転換後の著しい学生増加に対して教室など設備の拡充、また、施設面での大学院の充実を目指すものとして拡充五カ年計画が立てられ。この計画では、第1学舎の新築や第2学舎の増築、大学ホール・研究室の新築、図書館の増築などに続き、秀麗寮の購入・増築、尚志館の増築、高等学校の千里山移転・新築、天六学舎の増築など多方面に及ぶ大事業となり、これ以降、村野は関西大学の学舎建設に大きく関わることになった。

## 3. 関西大学記念館移築工事について

「関西大学記念館移築工事」と名付けられたこの計画案は、大学本館のシンボルとなっていた角にある八角形の塔部分の部材を用いて、記念館を作るというものであった。

大学本館は、当初「関西大学千里山校舎設計略図」なるものに基づいて新たに作られるはずであった。しかし、1923（大正12）年に火災によって校舎建設用に保管していた材料が焼失したため建設が頓挫し、もともと住友合資会社の総事務所（東区北浜5丁目）であった建物を、同社の社屋新築に伴って関西大学が譲り受けた。この本館は、千里山に移築後、式典や音楽会など様々な催し物に使用されていたが、拡充

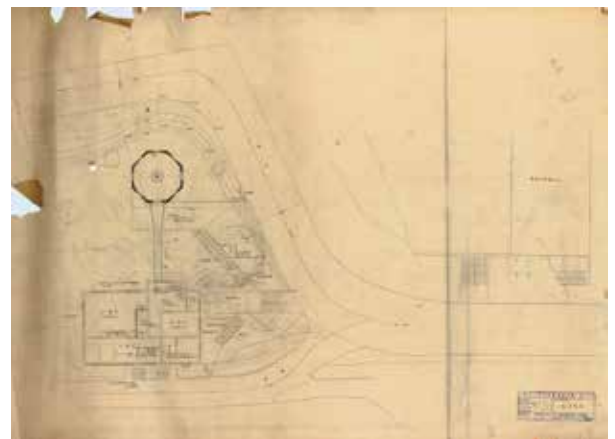


図2 「関西大学記念館移築工事 1階平面図」  
(京都工芸繊維大学工芸資料館所蔵 AN. 5159-78)

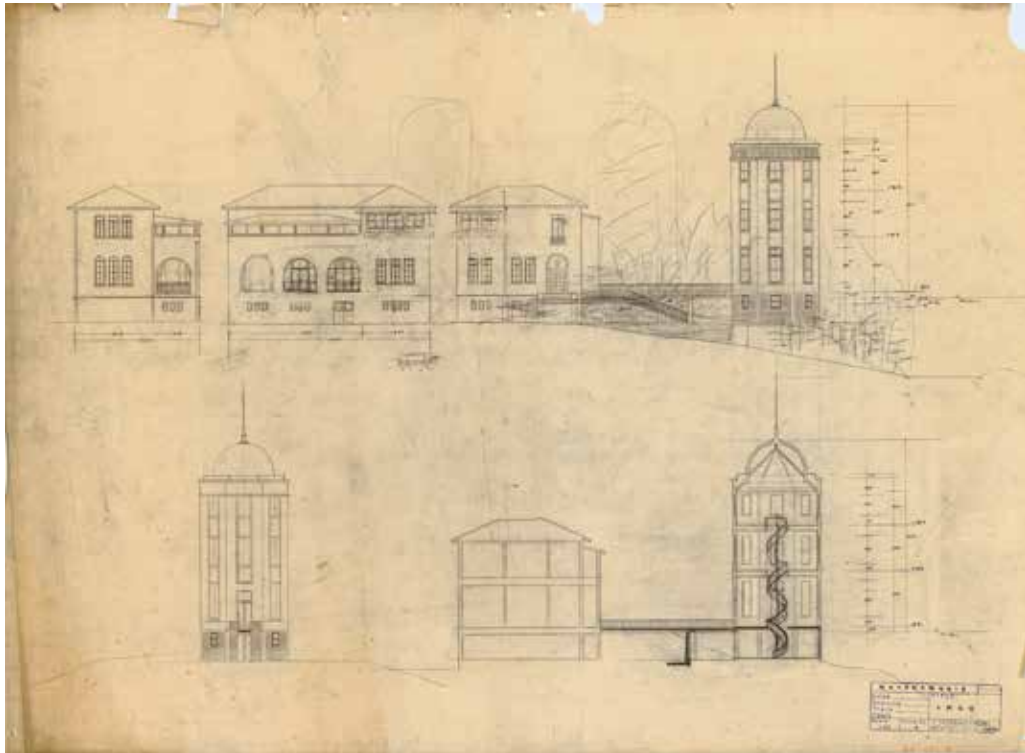


図3 「関西大学記念館移築工事 立断面図」(京都工芸繊維大学工芸資料館所蔵 AN. 5159-80)

五カ年計画による第1学舎建設にあたり、老朽化して危険な場所もあったため、1954(昭和29)年に撤去された。取り壊した後、記念塔として用いられる部材は、しばらく残されていたが、この計画案がなくなるとともに処分されている。

この計画案に関する図面は、4枚と少ない。変遷を追うようなエスキースの段階はないが、どれも明示的に書かれている。AN.5159-78の平面図(図2)には、クラブハウスの1階に診療室や休養室、薬局などの記載があり、保健管理センターに改修されている。記念塔はクラブハウスの西側に計画され、クラブハウス北西隅に玄関ホールが設けられており、連絡ブリッジを用いて接続されている。法文坂を歩いている途中では少し見えづらい位置にあるが、昔の正門側から登ってくると一番初めに目に入るシンボルのような建物として計画されていたのだろう。

AN.5159-80(図3)では、立面図と断面図が書かれている。大学本館時には、3階建てであったが地階部分が増築されている。この地階部分は、構造部分の柱が露出し、その柱の間をタイルまたはブロックで埋める村野らしいデザインが見られる。また、アクセスについては、連絡ブリッジからだけでなく地盤面の高さにも

入り口が設けられている。この記念塔部分は、大学本館時は応接室として利用されていたが、計画では中心に螺旋階段があるのみで用途に関しては何も記載されておらず純粹に塔として、また大学のシンボルとして用いる計画となっている。

この計画は、図面の書き込み具合から、実施に向けてかなり具体的な検討が行われている。計画が中断した理由ははっきりしないが、この時期は、学舎の拡充が目覚ましいことから、実用的な用途を持たないこの計画は、後に回されたのではないかと考えられる。

#### 4. 関西大学将来計画試案について

この計画案は、「関西大学将来計画試案」と



図4 関西大学将来計画試案 イメージ



図5 「関西大学将来計画試案 配置兼平面図」  
(京都工芸繊維大学工芸資料館所蔵 AN. 5164-02)

名前が付けられており、1967（昭和42）年に書かれたものである。図面の枚数は12枚あり、うち5枚がコピーされたものとなっている。

概要は、高層棟の本部及総合研究所と扇形のホールを中央グラウンドがあった場所に建てる計画である。1968（昭和43）年に社会学部研究室が竣工した後のものであり、この後に竣工される学舎は、第4学舎2号案研究棟と岩崎記念館、関西大学第一高等学校校舎1号館の3つであり、千里山キャンパスでの村野の計画において後期にあたる。

この図面が描かれた背景として第3グラウンドと第4グラウンドの開設が考えられる。「関西大学百年のあゆみ」には、「昭和34年から42年まで取得できた総合グラウンド用地のうち2万4442㎡余りを第一工事分として整地し、昭和45年10月に第3グラウンドとして完成させた。その後、第4グラウンド建設の話が昭和51年秋ごろに具体化し、昭和53年8月から翌3月まで基礎造成工事を行い、昭和55年11月から昭和56年8月まで仕上げ工事を施し、昭和57年4月にオープンさせた。完成した第4グラウンドは第4種陸上競技場の公認を受けた。」と記載されていることから、中央グラウンドの必要性が低下し、千里山キャンパスの中心にグラウンドに代わる活動拠点を計画するため、この図面を書いたのではないだろうか。また、AN.5164-01の図面には第3グラウンドと第4グラウンドが書き込まれており、グラウンドが完成する以前から村野はこの話を知っていたと考えられる。

AN.5164-02（図5）の図面では、校門が大きなものになっており、中央グラウンド部分



図6 「関西大学将来計画試案 屋上平面図」  
(京都工芸繊維大学工芸資料館所蔵 AN. 5164-14)  
一部抜粋

の南半分を庭園にし、北半分に地上20階の本部及び総合研究所と5000人が入る大ホールが書かれた平面図となっている。この大ホールはもとの地形にあわせて扇状に計画されており、スタンドがあった場所を客席に変え、既存の様子を取り入れた計画となっている。また、グラウンドに沿って曲がっていた法文坂も直線的な通路になっている。AN.5164-14（図6）は、「屋上平面」というタイトルがつけられており、本部及び研究所とホールの伏図が書かれている。この図では、大ホールの屋根を屋上庭園とし、その扇沿に4カ所の吹き抜けが設けられている。また、扇状の屋上庭園の親骨部分は法文坂の高低差を処理しつつ本部にアクセスしている。AN.5164-15（図7）の断面図には、本部は、地下2階、地上20階で高さが約70mと書かれている。本部の地盤面を基準にするとホールも地下2階まであり、高さは本部の5階の高さとなっている。このホールの屋上は、第1学舎のグラウンドラインにあわせて書かれ第1学舎1号館の前に広場ができるような形となっている。また、もともと少し高い位置にあったグラウンドの位置には点線が引かれており、計画された本部前の庭園は校門からまっすぐ進む通路の高さとあわせられていることから、切土による整地が行われている。AN.5164-02では、大学全体の植栽が細かく書き込まれており、外構計画についても重視していたことが読み取れる。

計画の図面には、建物は概形しか書かれておらず、ファサードのデザインについて詳しいことはわからない。しかし、いずれも敷地全体との関係をみる図面となっている。村野は、しばしば以前の雰囲気踏襲し、可能な範囲内で自



分の意図を加えることで、全体をくずさず、まとめ上げる設計を行う。敷地全体が書かれているのは、キャンパスで一番大きな建物となることもあり、その建物が建つことによる全体の印象を見ていたのではないだろうか。また、もともとあった中央グラウンドが学生やキャンパスの中心として、シンボルとなっていたことから、スタンドを客席に代えるといった用途変更を行いつつ保存するとともに、新たな学生活動の中心となる場所を作ることで、その存在の保存も行いたかったのではないかと考えられる。

## 5. さいごに

小林秀彌著の「大学キャンパス計画」では、大学をシンボライズする意味で、大学構内ならびに近隣から眺めるような高い塔をその中心部に建てるということが普通というような時代があったとされている。このような塔は、大体大学のシンボルとしての景観または塔に登って景観を楽しむというのが主な用途とされ内部は縦動線のみとなっていることが多く見られる。そこで実用的なキャンパスの塔として高層ビルが建てられるように変化したと述べている。これについては、今回の2つの計画案からも同様の変遷がみられる。また、このような実用性を持つ高層の校舎としてはピッツバーグ大学の「勉学の大聖堂」(42階)やエール大学の「クライ

ン・タワー」(17階)などがある。また、日本では丁度この図が書かれた年に最高高さが65mの学校建築として「早稲田大学理工学51号館」が1967(昭和42)年3月に竣工しており、早稲田大学出身の村野には印象的な計画であったのではないだろうか。

千里山キャンパスは、マスタープランのない中で計画されてきた。この「関西大学記念館移築工事」、「関西大学将来計画試案」から、村野は千里山キャンパスにおいて大学のシンボルとなるような建築物を必要としていたことが窺える。また、村野にとって中央グラウンドという形でなくとも、キャンパスの中心には学生活動の拠点となるような存在を配置すること、各学舎ゾーンの中心に、その存在が出来ることで、扇の要のようにキャンパス全体をまとめようとしていたのではないかと考察する。

### 【主要引用・参考文献】

橋寺知子「関西大学年史紀要28巻/関西大学本館について」2021年、西田貫人「2017年度3月修士論文/京都工芸繊維大学所蔵「村野コレクション」から見る関西大学の建築—外部空間の構成手法について—」、神子久忠 編集「村野藤吾著作集 全一卷」鹿島出版 2008年、関西大学百年史編纂委員会「関西大学百年史資料編」関西大学 1996年、関西大学百年史編纂委員会「関西大学百年のあゆみ」関西大学 1986年、小林秀彌「大学キャンパス計画」彰国社 1978年

関西大学博物館 学芸員

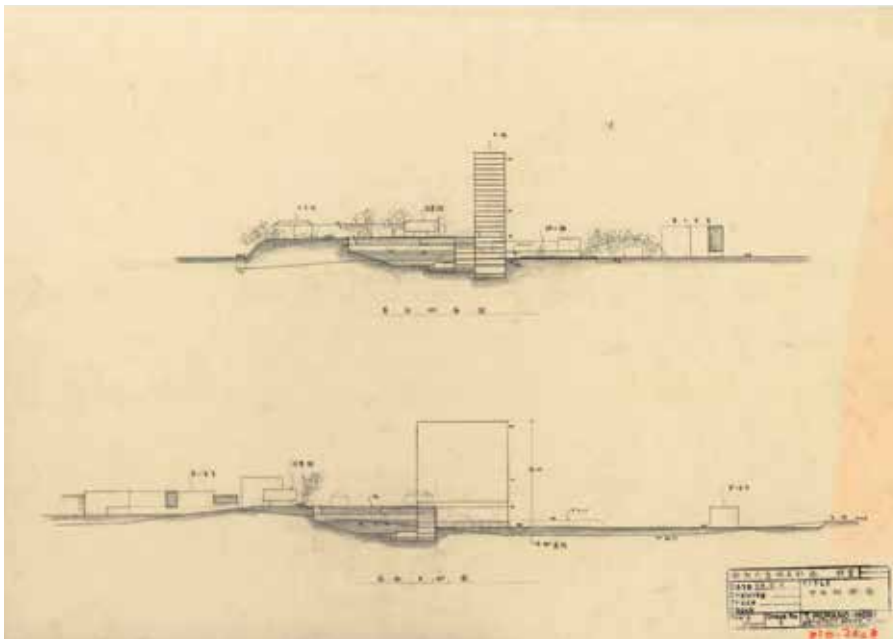


図7 「関西大学将来計画試案 中央部断面」  
(京都工芸繊維大学工芸資料館所蔵 AN. 5164-15)